
とある少年の異世界物語

g g

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある少年の異世界物語

【Nコード】

N3536BA

【作者名】

ggg

【あらすじ】

なんか良く分からないうちに少年が変なことに巻き込まれてとりあえず生き残ろうと頑張るお話。

第一話（前書き）

まず言えるのは、下手くそです、そのことをご了承ください
あと、ノリで書いてます、先がどうなるのか自分でもわかりません

第一話

拝啓 お父様お元気でしょうか？病気はしていませんか？怪我はして
いないでしょうか？

私は、今・・・とても大変ななっています。主にあのバカのせいで・・・

[illegible]

時は、遡ること数時間前

「あ
あ
あ
あ
づがれた」

「ははははは、オヤジ臭いぞ」海

「誰のせいだと思っているんだ？」

「あははははは……まあいいじゃないか」

「なあ陸よ、俺はお前と違って無償奉仕は嫌いなんだ・・

「たたく何が悲しくて無償で女一人を助けるためにヤの付く自営業のみなさん

とケンカしなくちゃならんのだ……」

陸「いいじゃないか、あの子も感謝していたよ」

「それはお前に対してだ。俺は何も言われてないぞ」

俺の名は武田海、
高校1年生16歳

特徴 老け顔、目つきの悪さと顔のバツテン傷

特技は逃げることに、隠れることに、料理、洗濯、家事、育児

苦手なことは人助け

嫌いなことは無償奉仕、ただ働き

好きなことは寝ること、ゴロゴロすること

趣味は、アニメ・映画・格闘技の鑑賞、読書

備考 幼いころから元海兵隊だった叔父さん（父親の妹の旦那）から海兵隊式格闘技ビックフットを習い、祖父から柔道・空手・剣道を叔母（父親の妹）から合気道を、叔父の友人から古式ムエタイを習い腕前は良くも悪くもないが体は鍛え続けた。

親友の上杉陸に巻き込まれて大嫌いな無償奉仕活動で

不良に絡まれた少女やヤクザに売られそうになった美少女

を助け、助けた手柄は陸に持っていかれ

裏社会ではその強さから畏れられ

表社会では根も葉もない噂で恐れられている

その強面のせいでヤクザと勘違いされることもシバシバ・・・

「まったく、お前のせいで俺は、何もしてないのに怖がられているんだぞ

お前俺がなんて呼ばれてるか知ってるか？」

陸「？」

「鬼、闘神、悪魔、ケンカ屋、プレデター、史上最強の害虫・・・」

陸「顔怖いからね」

「それに比べお前は・・・成績優秀運動神経抜群容姿端麗品行方正俺とは真逆で、女子からはモテモテ、勇者とか王子様とか呼ばれている・・・

まあ、その中世的っていうか女に近い顔のせいで一部男子にも人気・・・

どこの無敵超人！？あらゆるニーズにこたえました！？」

陸「まあまあ、落ち着けよ」

「はあ・・・ん？」

陸「どうしたんだ？」

「陸・・・」

陸「なんだ？」

「お客様だ・・・」

前を見ると、少女が立っていた

おそらく中学生であろうその小さな体に見合った

かわいらしい手には、ラブレターと思われる

封筒が握られている。

顔は整っていて頬には朱がさしている。

少女「あ、あの！」

陸「なんだい？」

少女「これ、私の気持ちです！！」

そういつて手紙を差出て陸が受け取るのを確認するなり
走って行ってしまった

陸「ん」

「そうしたんだ？」

陸「名前を聞き損ねた」

「そうかい、どうせ断るんだろ？」

陸「まあね」

「もったいない、結構かわいい子だったじゃないか」

陸「いや、僕にはもったいない、彼女にはほかにふさわしい
人がいるよ」

「・・・そうかい・・・ならばもう言うまい」

陸「ありがとう」

しばらく談笑しつつ歩いていた
何時もの帰宅道をいつも道理に・・・

だが、その時ばかりは違った・・・

陸「・・・なあ海・・・」

「なんだ？」

陸「何か聞こえないか？」

「いや・・・なにも聞こえないが」

陸「近づいてくる・・・」

「あん？」

すると、いきなり陸の足元に魔法陣みたいのが現れた
どうやら陸を引き込もうとしているようだ

「おゝ陸wwwよかったな勇者様に選ばれたぞwww」

陸「そんなこと言っでないで助ける！！」

「wwwお前なら大丈夫さwww」

陸「こうなったら！」

その場から立ち去ろうとしたとき

陸「逃がすか！」

「なっ！！！」

陸が俺の脚をつかんだ、突然のことで反応できずそのまま・・・

陸「死ぬときは一緒だ！！！」

「放せ！！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

A 3x3 grid of dots. The dots are arranged in three rows and three columns. The middle-left dot is missing, leaving 8 dots in total.

「
h
h
h
?」

もうろうつとする意識を無理やり起こし、周囲を確認する
暗かった視界が闇に慣れ視界が鮮明になる

「っ！」

周りには人がいた、松明に火を灯し始めたのか視界に光が入る俺は、すぐさま立ち上がり情報を集める

（人数は・・・123人・・・うち6名は革製と思しき鎧に短槍、腰には剣

ほかには2人が金属製のフルプレートアーマーに武器はレイピア・

後は神官か何かか)

次に俺は陸を蹴って起こす

陸「ん、んん？なんだ？ここは？」

すると、少女が一人陸に近寄る

「大丈夫ですか？」

俺は、とっさに身構える

「！！」

兵士と思しき達も槍を構え、騎士と思しきやつも、レイピアを抜く

「ここはどこだ！、貴様らは何者だ！何が目的だ！」
？「あの〜」

先ほどの少女が近づいてくる

「貴様は何者だ！」

少女に怒声を浴びせる、少女がビクリと震える
兵士が槍の穂先を俺に向ける

それに対して俺は、兵士に対して蹴りを浴びせる

兵士１「ぶふっ！！」

そのまま、うつむいている兵士を羽交い絞めにしてすぐに首をへし折れる
体制にする。

騎士１「その男を離せ！」

「その前に俺たちをさらった理由を言え！」

両者の間に緊張が走る、首筋を冷たい汗が伝うのを感じる

陸「まあまああ、海その人を話放してあげなよ」
「・・・」

緊張は解けた、陸の能天気な声を聴いた瞬間あきれた
相手の騎士も剣を収めた、兵士たちも構えを解いた

俺も兵士を解放した

陸「え〜ととりあえず今どうなってるの？」

？「わたくしが説明いたしますわ」

陸「君は？」

アリア「わたくしの名はアリア・バレッタリート・ダイ・バレンシ
アーネ

この国の第3王女ですわ、アリアとお呼びくださいませ」

陸「僕は陸、上杉陸、陸って呼んでくれ」ニコッ

アリア「！、わ、わかりましたわ」

（落ちたな）

アリア「ところでリクさま」

陸「なに？」

アリア「この男は？」

陸「ああ、こいつは海・・・俺の親友だ」

「武田海だ」

アリア「ふんっ」

どうやら最初のいざこざで好感度は悪いようだ

アリア「ところでリク様」

陸「？」

アリア「どうかこの世界を救ってくださいませんか？」

陸「僕にできることなら何でもするよ」

アリア「あ、ありがとうございますー！！」

その後、別の部屋に連れて行かれいろいろな説明を受けた後
王の間の連れて行かれる

王「勇者リクよお主は我らに何をもたらす？」

リク「は！私は自分の持てる力のすべてを使いこの国に、この世界
に平和を

もたらすことを約束します」

王「うむ」

王は満足したようにうなずいた

王「ではこれより宴を執り行う！」

王の宣言とともに音楽が流れ始め、陸はたちまち人に囲まれる

（相変わらずだな）

？「お主」

「ん？あんた誰？」

レイア「私はレイアこの国の第2王女だ」

「そうかい、でその王女様が俺に何のようだ？」

レイア「お主が気に入った」

「ああ？頭おかしいんじゃないの？」

レイア「そんなことを言われるのは初めてだ」

「で、俺が気に入ったって・・・なぜ？」

レイア「まずお主は、召喚されてすぐに起きた」

「ふむ」

レイア「そしてすぐに、現状の把握と情報の収集に努めた」

「それで」

レイア「決してひるまず、堂々としており槍を向けられても顔色一
つ変えなかった」

「・・・」

レイア「あまつさえ、その兵士を倒し人質にするまでの一連の流れが洗練されていた

しかも精鋭の騎士の殺気に怯むどころか逆に殺気で返した」

「・・・・・・」

レイア「ほめておつたぞ、決してあの男とはたたかいたくないとな」

「・・・・・・」

レイア「他のものは、リクに好感を示し勇者と言っているが、私はお主のほうか

勇者に向いている気がするぞ？」

「冗談言つな、勇者なんて柄じゃない・・・それにただ働きなんて冗談じゃない」

レイア「報酬は出るのだが」

「名声なぞいらん」

レイア「なら何がほしいのだ？」

「平穩」

レイア「・・・・・・」

「・・・・・・」

レイア「くく、くくく、ははははははは！」

「・・・」

レイア「面白い、ますます気に入ったぞカイよ！」

？「レイアさま」

レイア「んん？ああ、お前か」

声のするほうを見ると、一人のメイドが立っていた

銀色の髪をショートカットにしたとてもスタイルのいい人だった

レイア「カイよ紹介しよう、私の専属の召使いローズだ」

ローズ「お見知りおきを」

「カイだ好きに呼んでくれ」

ローズ「ではカイ様と」

レイア「ローズよ今日はめでたい日だ私とカイが出会った日だ
祝いに酒を飲もう」

ローズ「かしこまりました、カイ様は何にしますか？」

「ウイスキーをロックで」

ローズ「ウイスキー？」

「ああ、すまん・・・何でもいい強い酒をくれ」

ローズ「かしこまりました」

彼女はどこかに飲み物を取りに行った

（っくか美女・美少女率高いな）

ローズ「お待たせしました、レイアにはワインを、カイ様にはこの
アカシアを」

渡されたのは

（まんま、ウイスキーだ）

レイア「では、乾杯」

ローズ「乾杯」

「乾杯」

互いに杯（俺のはグラス）を軽くぶつけてから口に運んだ

（味も、ウイスキーだ・・・）

レイア「お主、酒に強いのか？」

「なぜ？」

レイア「その酒は普通は果実のしぼり汁で薄めて飲むものだぞ」

「そうなのか」

ローズ「はい」

「俺はこれが普通なのだが」

.....

レイア「ん」程よく酔ってきたぞ」

レイアの顔は少し赤身を帯びている

ローズはあまり飲まないため変化はない

ローズ「正直ここまで強いとは・・・」

レイア「予想だにできなかったぞ」

「？」

レイア「そんなに飲んで、まだ素面なのか」

「そんなにつて、たいしたことないけど」

レイア「お前は、オーガかタイタンか？」

「なんだ？それは」

ローズ「オーガは酒とケンカが好きな粗暴な蛮族です

タイタンは筋骨たくましくその肌は岩のように固い

巨大な体の種族です」

「へ」

すると

リク「よお、カイ！」

「お前か」

リク「どうも親友がお世話になっています」

レイア「うむ」

ローズ「それほどもありません」

リク「ほら、カイもつと飲むぞ！」

「はあゝ・・・」

リク「はははははっは」

・・・

・・・

・・・

・・・

翌日

リク「うゝ・・・頭痛い・・・」

「あんなに飲むからだ」

リク「カイはなんでそんなに強いんだ？」

「いろいろあつたんだ・・・」

今日はやることがいろいろある

まずは

アリア「魔法適正を調べるのですわ」

リク「どうすればいいの？」

いまおれたちは、不思議な部屋にいた、部屋の中央に祭壇がありその周りを囲うように水晶玉が置かれた台座が八つあった

アリア「この祭壇の上に立ってください」

陸が進む

アリア「次に精神を集中して、心を空っぽにするのです」

しばらくすると、台座が光だした

アリア「もういいですよ」

リク「ふう」

台座を見ると一つ目は何もない二つ目も何もない
三つ目も変化はない四つ目は変化があった

茶色い紋章が浮かんでいた

五つ目は何もない六つ目はすごかった

光ってる太陽のごとく光っている

七つ目と八つ目は何もなかった

アリア「リク様は光と大地ですわ」

「やったじゃん勇者っぽくて」

次に俺も同じように祭壇に立ち精神を集中した

結果は、一つ目から変化があった

燃えている、赤々した火柱が立っている

二つ目は凍り付いていた

三つ目は放電していた

四つ目は特になし

五つも特になし

六つ目も特になし

そして七つ目は

アリア「これは!!」

リク「どうかしたの」

アリア「闇!あなたは闇属性ですわ!」

「へえ」

リク「何かやばいの?」

アリア「昔から闇属性は魔に落ちるといわれていますその証拠に魔王は闇の魔法を使いますし

闇族の人の多くは魔に落ち多くの人を苦しめましたわ」

「へえ」

アリア「これは大変なことになりましたわ」

リク「まあ、カイなら大丈夫さ」

八つ目は・・・

リク「鏡?」

アリア「これはわかりませんわ」

取れあえず属性がわかったので部屋を出る

リク「この後は？」
アリア「武器選びですわ」

．．．．．

．．．

武器庫

リク「へえ、いろいろあるな」
「．．．」

ほんとにいろいろあった
オーソドックスな剣や弓矢、槍などの他にも杖や指輪
さらにはこんなものどうやって使うのか使用用途がわからないもの
まで
あった

リク「．．．よし、これにしよう」

そういつてリクは一振りの剣を握る

リク「?．．．!!」

アリア「どうしました？」

リク「．．．っ!．．．はあはあ．．．すごい」
「？」

リク「ねえ、アリア」
アリア「はい？」

リク「剣に妖精っているんだね」

アリア「ええええええええええええ！！！！！」

「うん、うん」

リク「どうしたの？」

アリア「それは、法具です！」

リク「法具？」

アリア「はい、精霊や妖精の宿った道具のことです普通の人では持つことは愚か触れることもできないのですが、さすがリク様です！！！」

リク「あははは、ありがとう」

リク「カイは何にするの？」

$$\begin{array}{c} \neg \\ h \\ h \\ \vdots \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \neg \end{array}$$

-
-
-
-
-
-
-

しばらくして、俺はとある箱に目が行った

「これは」

あけてみると、そこには

リク「どうしたの？・・・って、それは！」

アリア「どうしたのですか？・・・なんですか？その変なものは」

箱の中には武器が入っていた、古いものだったが、この世界ではおそらく超が付くほどのオーバーテクノロジーがそこにはあった。

リク「なあカイ・・・」

「ああ、間違いない銃だ……」

入っていたのはリー・エンフィールドMk？（なぜか、マガジン式でグリップが必要無いものだった

高倍率スコープ付き、弾は5・56ミリフルメタルジャケット弾）
ウィンチエスターレバーアクションM1873

シカゴタイプライター（マガジンは50発ドラムマガジン）
そして

「・・・」

（なぜ・・・なぜ、ハンドガンだけMk23？それもLAMとフラッシュライト付き？）

リク「なあ・・・カイ」

「ああ、なんでこんなものが・・・」

俺の武器は決定した。銃器の他に投げナイフ19本（わき腹に4本、腰に左右5本ずつ、右肩に5本）

刃渡り25センチほどの片刃のナイフ（背中に袈裟懸けに背負う抜くときは左手で下から）

両手にアサシンブレードと革と金属でできたガントレット、トマホーク二本（腰からぶら下げてる）

投擲用の小型の鎌四本（背中に装着）ククリナイフ二本（後ろ腰に装備）

Mk23はレッグホルスターに、シカゴタイプライターはスリングで吊るし

M1873は背中に鞘に入れた状態で背負う、エンフィールドは背中に袈裟懸けで

現在服装はアサシンクリードのアルタイルみたいな恰好

アリア「さあ、行きましょう」

リク「どこに？」

アリア「仲間の元へ」

第二話

リク「カイ〜がんばれ〜」

アリア「すぐに、やられてしまいますわ」

？「二人とも頑張ってください」

なぜこうなった・・・

？「さあ！来い！！」

遡ること2時間前・・・

リク「仲間？」

アリア「はい、今のリク様一人では魔王には勝てません。そこでリク様とともに旅に出る仲間を二人用意しましたわ」

リク「それは、頼もしい」

しばらく行くと、開けた場所に出た

アリア「着きましたわ、ここが訓練所、ここでは騎士や衛兵が訓練をしていますわ

リク様もここで訓練することになっていますわ」

（ん？あそこにいるのは・・・人か？）

見ると二人の少女が近づいてくる

片方は甲冑に身を包んだ金髪の美少女

もう一人はローブを羽織り手には立派な杖を持った水色の髪の少女
その二人がゆっくり近づいてくる。

リーナ「お待ちしておりました、勇者リク様、私はリーナ・サンド
ラ。」

近衛騎士見習いです。」

アイシャ「わ、私は、ア、アイシャ・エンテオフェシアです
魔術師見習いです。」

対照的な二人だった・・・リーナは堂々としていてとても落ち着いて
大人な雰囲気です
アイシャは頼りなく、恥ずかしがり屋でどこか危なっかしくて少し
子供っぽい雰囲気だ。

アリア「この二人は今用意できる最高の人員ですわ、アイシャはこ
う見えて未来の筆頭魔術師と言われ
闇以外のすべての属性に適性を持っていますわ。」

リク「へえ、すごいね」「ニコッ
アイシャ「そ、そんなことはありません」

(また一人落ちたか・・・)

アリア「・・・リーナは近い将来近衛騎士団長の地位が約束されて
いるとまで言われていて

その腕前は千人隊長と比べても遜色はありませんわ」

リク「それはすごい」

リーナ「いえ、私はまだまだです」

リク「二人ともよろしく頼むな」

リーナ「こちらこそ、あなたと戦えること光栄に思います」

アイシャ「よ、よよ、よろしくお願いします!」

リーナ「・・・ところで」

リク「?」

リーナ「あなたが、カイ殿で違くないか？」

「ああ」

リーナ「私には、とてもあなたが歴戦の戦士には思えない」

「ああ、俺戦士じゃないし」

リーナ「しかし、副長はあなたと対峙した時、まるで歴戦の戦士と対峙したかのように

だったと言っていた」

「副長？・・・ああ、あの時の騎士か」

リーナ「私と勝負していただけないだろうか」

「なぜ？」

リーナ「私は、副長がそこまで評価するあなたと戦ってみたい」

バトルジャンキー
「戦闘狂か」

リーナ「さあ、早く闘りましょう」

・・・

・・・

現在

リーナ「さあ！来い！！」

「はあ」

相手は剣を抜き放ち油断なく構えている

（確かにかなりの実力者のようだな）

リーナ「来ないのなら、こちらから行くぞ！！」

そういつて彼女が向かってくる

彼女の攻撃を最少の動きでかわす

リーナ「はあ!!」

そして、一瞬隙を見せると彼女は疑いなく大ぶりに上段から剣を振り下ろす

「ふっ!!」

リーナ「!!」

一気にリーナの懐に入ると、まず彼女の服の襟を取り、次に右手をつかみ

最後に彼女を自分の腰に寄せ引手を勢いよく引つ張ると彼女の剣を振り下ろす動作と

自分の腕を引く動作、そして勢いよく腰を跳ね上げる動作により、彼女は宙を舞う

そして・・・

ドゴッ!!

リーナ「ぐっ!!」

背負い投げで受け身も取れずに地面に背中から打ち付けられ、息が詰まったあとせき込む

リーナ「ぐはっ!!げほっ!!ごほっ!!」

「ふっ!!」

しかしこれで終わりではない。

リーナ「!!」

その後更に追い打ちをかけるように腹を殴る

どすっ！！

リーナ「ぐあっ！！」

鈍い殴打の音と共に革製の鎧の固い感触と女性特有のやわらかい感触がこぶしに伝わる

その後、素早く体を動かし後ろからリーナの上半身を持ち上げ

リーナ「！？」

首筋に腕を回し、前腕と二の腕で動脈を締める

リーナ「ぐっ！！」

そのまま、一気に力を込めると、周りが止める暇も本人が抵抗する隙も与えず

に彼女は意識を失った

アリア「リーナさん！」

アイシャ「リーナちゃん！」

リク「リーナ！」

彼女のブラックアウトを確認すると俺は腕を離して彼女を寝かせる

リク「カイ！お前何やってんだよ！！」

アリア「そうですね！殺す気ですか！？」

二人に責め立てられる、アイシャは必死に介抱している

「何って・・・背負い投げをした後殴ってダメージを与えた後スリパーホールドを

かけたんだけど・・・」

リク「死んだらどうするんだ!」

「死にはしない、たぶんそろそろ起きる・・・それに・・・殺す気なら首をへし折る」

アリア「っ!!」

リーナ「うん?」

アイシャ「気づきましたか?」

リーナ「そうだ、私は負けたのか・・・」

リク「大丈夫か?」

リーナ「はい、問題ありません・・・カイ殿は?」

「なんか用か?」

リーナ「今の技は?」

「技ってほどではない、ただお前の力を利用して投げただけだ」

リーナ「私の・・・力を・・・」

リク「ごめんな」カイは手加減を知らないから・・・」

リーナ「感服しました!!」

「?」

アイシャ「へう!」

リーナ「副長の言ったことは正しかった!」

「そうか・・・」

リーナ「カイ殿・・・折り入って頼みがあります」

「なんだ」

リーナ「私に体術の指南をしてくださいませんか?」

アリア「ええ!」

「ん」でもな・・・」

リーナ「何か不都合が？」

「いや・・・めんどくさいな・・・って」

リーナ「そこを何とか」

リク「いいじゃないかカイ教えてやれよ」

「まあ・・・いいか・・・」

リーナ「本当ですか！」

「ああ・・・じゃあ明日からこの場所で時間は朝飯が終わったら」
リーナ「はい！ありがとうございます！！」

・・・

アイシャ「そういえば・・・」

「？」

アイシャ「その背中のはなんですか？」

「ああ・・・これは武器だ・・・」

アリア「わたくしも気になっていましたがどんな武器なのですか？」

リク「そうだな・・・」

「弓矢より早く魔法より遠くを狙えて槍より鋭く剣より扱いやすくてそれでいて才能がいらない

武器・・・かな？」

リーナ「夢のようなものですな」

アイシャ「？」

「まあ、百聞は一見にしかず・・・」

そういつて俺はエンフィールドライフルを構える。

目標は300メートル先の弓矢用の的

アリア「何を？」

リク「しっ！・・・今は話しかけちゃだめだ・・・」

リーナ「はあ・・・」

カシャン

ボルトを引いて空の薬莖を排出する

カシャッ

そしてボルトを戻し薬室に装弾する

しやがみ撃ちの体制での狙う

神経を集中しすべての意識が的に向かう

すると、視界からは的以外のものがすべて消え、音が消える
そして、狙いが定まると・・・

パンッ！

乾いた破裂音が耳に入る、その瞬間世界は音を取り戻し
視界は元に戻る

訓練所には銃声が響き渡っている

アイシャ「すごい・・・」

リーナ「なんと・・・」

アリア「・・・」

三人は言葉を失い破壊された木製の的を見ている

「ふう・・・」

リク「お疲れ」

俺たち二人はいつも通りだった

アイシャ「す、すごいです!! あんなに遠くの的をあんなふうにするなんて!!」

リーナ「信じられない・・・だがカイ殿の言ったことは嘘ではなかった・・・」

アイシャははしゃぎほめたたえる、リーナは信じられないと言った面持ちだ

そして、アリアは

アリア「・・・恐ろしい・・・」

その武器の恐ろしさに恐怖を感じていた

・・・

・・・

・・・

翌日

「さて・・・今日が初訓練だが・・・これはどづいつことだ?」

目の前にはリーナとアイシャと・・・

ガヤガヤガヤ

戦士と思しき男たちがいた

リーナ「実はあの勝負のことを話したところ、皆がカイ殿の
体術に興味をもちまして・・・」

副長「ならば全員で教わろうと思ってな」

「あんたは・・・あの時の」

ジェスター「ジェスター・ローグだ近衛騎士団の副団長をやっている」

「そっちの人は？」

俺はそういつて隣にいる女騎士に向く

リーン「リーン・サンドラ・・・妹が世話になった」

ジェスター「彼女が近衛騎士団の団長だ」

そのほか、近衛騎士団24名

「近衛騎士団はこれで全員なのか？」

リーン「うむ、これで全員だ」

「訓練に参加するのはいいが・・・口答えはするなよ」

リーン「う、うむ・・・」(なんだ・・・この威圧感は・・・)

「よし・・・全員整列！！」

全員「！！」

全員がその言葉に反応し戸惑いながら整列する

「遅い！！、貴様らそれでも精鋭の近衛騎士か！！カタツムリの方がいくらか俊敏だぞ！！」

このボンクラどもが！！」

近衛1「なに！？」

近衛2「俺たちを侮辱するのか！」

「はん！！いきなり整列の号令をかけられる程度で戸惑っていて何が精鋭だ！！このクズどもめ！」

近衛1「なにおう！！」

リン「まて！彼はこれから我々に技術を教えてくれる師だ」

「そういうことだ口答えはするな、それとお前とお前はペナルティだその場腕立て伏せ50回！！」

近衛1「！！！」

近衛2「！！！」

「かれ！！！」

戸惑いつつ二人は腕立て伏せを開始する

「おら！もつと下げる！！・・・如何したお前ら！？」

全員「？」

「仲間がやっているのにお前たちだけ棒立ちか？・・・はっ！大した仲間意識だ！！」

全員「！！！」

「お前たち・・・その場腕立て伏せ50回」

全員「！？？」

ジエスター「なぜだ？」

「お前たちの仲間意識の薄さに対する罰だ」

全員が啞然としていた

「かれ！！！」

・・・・・・

結局全員が100回近く腕立て伏せをすることになった

「さて、これより訓練に移行する・・・いいかよく聞け！！お前たちはやれ精鋭だ近衛騎士だと呼ばれて

いい気になっていようだがそれはお前たちの前の偉大な先輩方のおかげだ！！お前たちがすごいわけではない！！

お前達はクズだ！！ゴミだ！！この世で最も劣った存在だ！！お前たちに人権など存在しない！！全員等しくクズだ！！」

全員「・・・」

「まあいい、まず最初にやることは簡単だ、走る」

全員「へっ？」

「どうした？間抜け面をして早く走れ、そこに置いてある丸太を担いで走れ」

近衛3「あゝ・・・」

「なんだ糞虫、発言は許可していないぞ？」

近衛3「は、発言の許可をお願いします」

「声が小さい！！もう一回！！」

近衛3「発言の許可をお願いします！！」

「もつとだ！！」

近衛3「発言の許可をお願いします！！！！」

「どうしたまだ小さいぞ！！生まれたてのヤギの方がまだましな声を出すぞ！！」

近衛3「発言の許可をお願いします！！！！！！」

「ふんっ！、まあいい、でなんだ？」

近衛3「どこを走るのでしょうか？」

「いい質問だ糞虫！！貴様は昇格したお前はこれから上等な糞虫だ！！どうだ、うれしいか！！」

近衛3「はい！！！！」

「よし、走る場所はこの訓練所だ」

リン「何周するのだ？」

「発言を許可した覚えはないぞ、このビッチ！！」

リン「な！・・・くっ！」

「どうした？糞ビッチ」

リン「は、発言の許可を願う！！！！！」

「いい声だ！何周走るかはこの俺が決める！！俺の気分だ！！俺が
良しというまで走り続ける！！」

分かったかこのド腐れ糞マ○ンコ！！！」

リン「わかりました！！！」

「それともう一つ！！返事はすべて『レンジャー！！』だ！！わか
ったか！！！」

全員「レンジャー！！！！！」

・・・

・・・

「Mama and Papa were laying in
bed」

ママとパパはベッドでコロコロ

全員「Mama and Papa were laying i
n bed」

ママとパパはベッドでコロコロ

「Mama rolled over and this is
what she said；」

ママが転がり、こう言った

全員「Mama rolled over and this i
s what she said；」

ママが転がり、こう言った

「oh, give me some . . .」
お願い、欲しいの . . .

全員「oh, give me some . . .」

お願い、欲しいの . . .

「 . . . P . T . !」

じいいてー！

全員「 . . . P . T . !」

じいいてー！

「Good for you」

お前によし

全員「Good for you」

お前によし

「and good for me!」

オレによし

全員「and good for me!」

オレによし

「Mmm good」

うん、よし

全員「Mmm good」

うん、よし

「Up in the morning to the rising sun!」

日の出とともに起き出して

全員「Up in the morning to the rising sun!」

日の出とともに起き出して

「Gotta run all day till the running's done.」

走れと言われて一日走る

全員「Gotta run all day till the running's done.」

走れと言われて一日走る

「Ho Chi Minh is a son of a bitch!」

ホーチミンはクソツタレ

全員「Ho Chi Minh is a son of a bitch!」

ホーチミンはクソツタレ

「Got the blue balls, crabs and the seven-year itch!」

梅毒、毛ジラミ、ばらまく浮気

全員「Got the blue balls, crabs and the seven-year itch!」

梅毒、毛ジラミ、ばらまく浮気

「I love working for Uncle Sam!」

アンクル・サムが大好きな

全員「I love working for Uncle Sam!」

アンクル・サムが大好きな

「Let's me know just who I am!」

オレが誰だか教えてよ

全員「Let's me know just who I am
!」

オレが誰だか教えてよ

「One,two,three,four,Valencian
a Marine Corps!」

1、2、3、4、バレンシアーネの海兵隊!

全員「One,two,three,four,Valenci
ana Marine Corps!」

1、2、3、4、バレンシアーネの海兵隊!

「One,two,three,four,I love th
e Marine Corps!」

1、2、3、4、オレの愛する海兵隊!

全員「One,two,three,four,I love
the Marine Corps!」

1、2、3、4、オレの愛する海兵隊!

「My Corps!」

オレの軍隊!

全員「My Corps!」

オレの軍隊!

「Your Corps!」

貴様の軍隊!

全員「Your Corps!」

貴様の軍隊!

「Our Corps!」

我らの軍隊！

全員「Our Corps！」

我らの軍隊！

「Marine Corps！」

海兵隊！

全員「Marine Corps！」

海兵隊！

「I don't know, but I've been
old...」

人から聞いた話では

全員「I don't know, but I've been
told...」

人から聞いた話では

「...Eskimo pussy is mighty cold！」

エスキモーのプッシー、冷凍マン庫。

全員「...Eskimo pussy is mighty cold！」

エスキモーのプッシー、冷凍マン庫。

「Mmm, good！」

うっん、よし。

全員「Mmm, good！」

うっん、よし。

「Feels good!」
感じよし。

全員「Feels good!」
感じよし。

「is good!」
具合よし。

全員「is good!」
具合よし。

「Real good」
すべてよし。

全員「Real good」
すべてよし

「Tastes good!」
味よし。

全員「Tastes good!」
味よし。

「Mighty good!」
すげえよし。

全員「Mighty good!」
すげえよし。

「Good for you!」
お前によし。

全員「Good for you!」
お前によし。

「Good for me!」

オレによし。

全員「Good for me!」

オレによし。

「I don't want no teenage queen!
」

スカした美少女、もういない

全員「I don't want no teenage queen!
」

スカした美少女、もういない

「I just want my this sword!」

オレのオンナはこの剣!

全員「I just want my this sword!
」

オレのオンナはこの剣!

「If I die in the combat zone.」

オレが戦闘で倒れたら

全員「If I die in the combat zone.

」

オレが戦闘で倒れたら

「Box me up and ship me home.」

箱に入って帰国する

全員「Box me up and ship me home.」

箱に入って帰国する

「Pin my medals upon my chest!」

胸に勲章、飾り付け

全員「Pin my medals upon my chest
」

胸に勲章、飾り付け

「Tell my mom I've done my best.
」

告げてよママに、見事な散り様

全員「Tell my mom I've done my best.
」

告げてよママに、見事な散り様

・・・

・・・

ミリタリーケイデンスを歌いながら走る
すると

ドサッ！

近衛4「うつつ
」

一人が俺の前で倒れた

「どうした！！糞虫！！早く立！！」

近衛4「くう！」

「早くしろこの糞虫！！どうした！！もう走れんのか！！この軟弱
ものめ！！」

貴様のような奴はとつとやめてママのおっぱいにでもしゃぶりつ

いてろ！！！」

近衛4「くそ〜！！」

近衛4は怒りに身を任せて殴りかかってくる

「ふんっ」

がしっ！

おれは、近衛4の拳を避けすれ違いざまに足払いをかける

近衛4は腹から地面に倒れ痛みに悶える

近衛4「ぐああああ！」

「ふんっ！少しは見直したぞ、この俺に攻撃を仕掛けるとは大したものだ・・・」

さあ立て！！俺に殴り掛かる気力があるなら立て！！」

近衛4「くそおおおおお！！！！！！」

そう叫んでから、近衛4は立ち上がり再び走り出す

・・・

・・・

「よし！！、貴様ら！！次に移るぞ！！！！」
全員「レンジャー！！」

・・・

近衛2「発言の許可願います！！！！」

「許可する！！なんだ？」

近衛2「次は何をするのでしょうか！！」

「次は障害走を行う！！」

障害走は一周1・000メートルで最初にハードルを五つ超え次に深さ2メートル程の堀を進みそこから上がって今度は高さ6メートルほどの

壁を登りその後しばらく普通に走った後再び高さ6メートルほどのオブジェをロープで登った後ロープで降りて、その後は、沼地を走る最後の100メートルは、有刺鉄線の下を匍匐前進でぐりゴールとなる。

「全員がかれ！！」

・・・

・・・

・・・

その後も訓練を続けた

「喜べ貴様ら！！食事の時間だ！！」

全員の顔に喜びの色が見える

「だが・・・」

全員「？」

「せっかく乗ってきたので私はこのまま訓練を続けたいと思う！！」
全員「！」

「どうだ!!お前たちもやらないか?」

全員「レ、レンジャー……」

全員がそついいながら首を振る

「そうか……」

全員「(ほっ)」

「そんなにやりたいか!!」

全員「!?!」

「お前たちは全員『レンジャー』と答えたからな、それは肯定の意として受け取るぞ」

全員「!?!?!?!」

「よし!!これより10マイル武装走を行う!!」

全員「……」

「返事はどうした!?!」

全員「レ、レンジャー!?!?!」

こうして、この日一日どころか3週間の地獄とも呼べる訓練を行った

ある時は

鎧も付けずに丸太で殴り合い

近衛1「おらあ!!」

近衛8「ぶふっ!!」

「どうした!!その程度か!!そんなに痛いふりをして同情を引きたいか!!」

近衛8「くっそおお!!!!」

「その調子だ!!」

ある時は的をひたすらに斬り続け

近衛3「うらあ!!」

近衛7「死ね!!」

「お前たちは人ではない!!殺すための道具だ!!いいかこの訓練が終わった暁にはお前たちは戦うためのマシンとなるそれまで貴様らは

ゴミ同然の存在だ!!わかったか!!この虫けらども!!」

全員「レンジャー!!!」

ある時は武器の手入れを

「お前たちには尻のデカイ女も×××の太い男も必要ない!!その武器が

お前たちの恋人だ!!恋人を慰めるように手厚く手入れをしてやれ!!!」

近衛1「ふ、ふふふふ、きれいだよアリス・・・」

近衛6「君がいれば何もいらない・・・」

近衛21「素敵な刀身だよナタリー・・・」

そして3週間に及ぶ訓練は終わった

「いいか貴様ら!!今日は訓練終了後の初の実戦だ!!」

全員「レンジャー!!」

「敵はこの国の騎士団50名だ!!魔法は使用禁止!!勝利条件は敵の全滅!!」

全員「レンジャー!!」

「よく聞け!!今日を持って貴様らは蛆虫を卒業する!!貴様らは海兵隊だ!!」

全員「レンジャー!!」

「栄光を勝ち取るか地獄に落ちるかの瀬戸際だ!!どうだ!楽しい

騎士団長「……」

騎士1「団長」

団長「なんだ？」

騎士1「騎士団の指揮が最悪です……」

副団長「あれを見せられちゃな」

騎士1「はい……」

カーン！

開始の合図がなつた

近衛騎士団「おおおおおおおおお おおおおおお
つおおおおお!!!」

騎士団「おおおおおおお！！！！！！」

「ふん！！」

ドガシャツ！！

俺の放った蹴りは一番前にいた騎士団長の顔面にめり込み一撃で昏倒させた

騎士団「団長！」

騎士1「団長……」

リン「軍曹殿が目にも見せたぞ！！野郎ども後に続け！！！」
近衛騎士「おおおおおお！！！！！！！！！！」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

・・・

・・・

結果は近衛騎士団の圧勝、相手の騎士団は全員病院送り・・・中には鎧がひしゃげるまで殴られた者や

兜が破壊された者もいた・・・その後近衛騎士団ではこの海兵隊式訓練は以後ブートキャンプとして

新兵の訓練に使われるようになり、その壮絶さは国の外にまで伝わった。

レイア「まったくお主は大変なことをしてくれた」

「そうほめるな・・・照れるじゃないか」

レイア「ほめてお・・・まったくあの後リーンとジェスターを元に戻すのが

大変だったんだぞ？」

「勢いでやった・・・後悔はしていない・・・」

レイア「お主は・・・まあ良いそれより」

「？」

レイア「お主には、魔術学校に通ってもらっ

「は？」

第二話（後書き）

やっちまった感たっぷりです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3536ba/>

とある少年の異世界物語

2012年1月9日20時51分発行